

「総ぐるみ」新聞

NPO 総ぐるみ福祉の会事務所は日限山 4・44・23 (八四四一七四七七)
 入会や活動のお問い合わせ先は、事務所または「日限山荘」 日限山 4・7・1

会員お二人による第三回座談会

於：日限山荘

交流事業としての第三回目の座談会を、先般一月三十日にのべ十九名の方が出席されて行いました。今回は、長谷川致正氏と大橋綾子氏をお迎えして、お話をしていたいただきましたので、紹介します。

●大正・昭和の時代と私

長谷川 致正氏

○子ども時代

私は大正十二年十一月、東京の芝区白金今里町(現在の港区白金)に誕生。この年は関東大震災が発生して、東京の下町に大被害をもたらしましたが、屋敷町の白金では万年塀が倒れた程度で、火災もなく、大きな被害はなかったと母親から聞きました。

大正十四年には治安維持法が成立し、この頃から日本は軍備拡張に走り、また、共産党に対する弾圧がしだいにひどくなるといような時代背景がありました。

子どもの頃の私は身体が弱く、青びょうたんといわれるくらいで、心配した母親から、おろした生にんにくをオブラートに包んで飲まされたりしました。

特に乗り物酔いがひどいため、小学校の奈良・京都の修学旅行にも参加できないほどでした。しかし、正則中学に進学した頃から、バスや電車を使って通学しましたが、乗り物酔いはなおってきました。

○桐生工業専門学校(現群馬大)に進学

織物の町、桐生の専門学校に進学したのは昭和十七年、太平洋戦争が始まっていた。二十歳になって受けた兵隊検査は第一乙種、工学部にいたため学徒動員は免れましたが、半年の繰上げ卒業で十九年の秋に卒業。東京芝浦電気(株)に入社しました。

○軍隊に志願

戦時色は日増しに強くなり、父親と相談の上、昭和二十年一月十日に軍隊に志願して、船舶特別幹部候補生となりました。

木造船を使って夜間訓練をしましたが、使命は輸送船業務で、船酔いもせずに務めることができました。訓練では、招集がかかる、完全装備(背嚢を背負い、銃剣を持つ)で走らされましたが、中隊の2/3は脱落。子どもの頃から短距離走はだめな私でしたが、専門学校時代から遠距離走は得意で、どうにか走ることができました。

香川県の豊浜で終戦を迎え、復員して東京に戻ったものの、工場は震災を受けて壊滅状態、復員者で溢れていても仕事のない状態で、辞めざるを得ませんでした。

○戦後、家族全員で滋賀県に移住

東京にアメリカ軍が進駐して来たので、父母は父の弟が暮らす滋賀県で暮らすことを決意して、家や家作も売り払い、私も含めて家族全員で移住しました。

滋賀県では県立水口高等学校の数学と理科の教員になり、程なく学制が変更となつて、新制の県立日野高校に転職しました。そこで、家庭科の教員として赴任してきた家内と知り合い、結婚しました。

○東京に戻る

その後、私は東京に戻りたくなり、昭和二十五年に、東京都教育委員会に職を得て上京したのです。以来、教育の行政畑を歩んで過ごしました。

●私の茶道修業

大橋 綾子氏

○茶道宗家の養女になる

私は昭和十二年十月に藤沢に生まれました。父は、サカタのタネの代理店と不動産業を営み、自宅では、叔母と長姉が茶道教室を開いて教えておりました。

私は中学生の頃から叔母や姉についてお

社協と共催の健康体操日程

三月二日(金)、二十日(火) 午後二〜三時 於 西洗・港南プラザ自治会館

茶会にも出席したりしていました。

その関係で、中学二年の時に東京でも有名なお茶の師匠、山下宗貞の養女になり、下北沢の大きな邸に住むようになりました。

○下北沢での生活

義母は、終戦の年に海軍軍人の夫を亡くしていました。戦前から私立の女子高の茶道・作法の教員もしていたので、私は試験を受けて、その学園に編入しました。

下北沢の邸には長年勤めたお手伝いさんや内弟子がいましたが、その人たちはお茶の先生そのもの、言葉遣いから動作などすべて直され、仕込まれました。

邸には三席の茶席があり、月一度炭一俵が届き、その炭を太さによって選び揃え、規定の長さに切り揃えたり、翌日のお茶のお稽古のための種々の準備をしたり、また、点心や会席料理の準備などを手伝いながら、すべて覚えていきました。この頃は遊んだ記憶がないほど、お花やお琴の稽古、家屋敷や茶庭の掃除など、やることばかりありました。

その後、義母は東京の邸を手放して、中央林間と南林間の間の別荘に居を移しました。しかし、日本茶友会の幹事でもあり、毎月護国寺や椿山荘でお茶会があり、私も付き添って出席していました。

○藤沢の実家へ戻る

義母の山下宗貞は、高齢になって病気がちとなって福岡の自家に帰ることになり、私は二十二歳の時に、京都の裏千家へ茶道修業に行きなさいと、相当のお金を持たされて、藤沢の実家へ戻りました。

実家では、姉と叔母の茶道教室の弟子は、お稽古を含めると約百人いて、折りしも夫が

転勤になって教えられなくなった姉に代わり、この弟子達と自分の弟子を含めて、若い身ながら大勢の生徒を教えることになり、たいへん忙しい生活になりました。

私の結婚に対しては、お茶のお弟子さんたちのことも考えると、転勤のある人はダメ、長男はダメと、縁談はなかなか決まりません。そんな折に、大橋の両親とわが家の両親の話合いで、九人兄弟の次男である現在の主人との話がまとまって、結婚しました。

○大家族の暮らしと姑の看病

結婚して最初に住んだ下永谷の家には、次男なのに夫の両親と、結婚していない弟達三人や、大おばあちゃんまで一緒に住むことになり、大家族の生活でした。

主人が四十三歳で胃がんととなって、食欲もなく、たいへん心配した時期もありました。姑は、晩年の五年、人工透析が必要となり、その看病で、夜は私が眠らずに過ごし、早朝主人が起きてから眠り、お茶の稽古のあるときは八時には家を出るといいう、無理をかさねる生活をしてきました。

私もこれからは、残り少ない人生、人様のお役に立つような人生を歩みたいと思っています。

第四回 座談会の開催

お話くださる方 **庄司俊二氏**
日時：三月十六日(金) 午後二～四時
場所：日限山荘

多数ご参加下さい、お待ちしております。

日限山四丁目在住の

上山高史氏を迎えて

ジャズコンサート開催

ピアノ伴奏 田村 博氏
日時 三月十八日(日) 午後二時から
場所 西洗・港南プラザ自治会館
入場料 無料

上山高史氏のプロフィール

【最初のデビュー】

一九三七(昭和十二年)東京生まれ
八歳から声楽とピアノを学び、九歳でNHKラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌を歌う。一九四七(昭和二十二年)、キング・レコードの童謡歌手となり、十五枚のレコードを録音。

【二度目のデビュー】

慶応義塾大学在学中の一九六〇(昭和三十一年)に、文化放送のスカウト番組で優勝し、ジャズ評論家の絶賛を浴びる。翌六一年大学卒業後に再デビューしたものの六三年に引退して、日揮(株)に入社、インドネシアやロンドンなどの所長として海外駐在勤務。

【三度目のデビュー】

一九九七(平成九年)、日揮退職と同時に、還暦で再デビュー。横浜・鎌倉・東京等の首都圏を中心に、ライブ活動を行っている。三枚のCDを発表。

多数の方の「来場を

お待ちしております。